令和３年度　文化庁

「文化関係資料のアーカイブの構築に関する調査研究」

報　告　書

令和４年３月

公益社団法人日本写真家協会

1　はじめに

令和３年度は、７月から開催された東京オリンピック、パラリンピック競技大会があった。前年に引き続き世界的に蔓延した新型コロナウイルス禍の為、無観客という異常な大会を余儀なくされた。その後も政府からの三密回避の協力要請により、多くの事業や大会、イベントなどが中止に追い込まれていった。しかし、日本写真保存センターでは写真原板収集・保存といった中心的業務は順調に推移し、国立映画アーカイブ相模原分館への入庫も着実に実績を上げてきた。

写真原板収集では存命の写真家と物故された写真家の遺族から寄贈の申し出あったことは幸いであった。又、岩波書店からは、過去に『奈良六大寺大観』を始めとする大観シリーズ27巻の写真原板と岩波写真文庫の撮影原板を収めており、この度更に1950年代の岩波写真文庫編集当時の版下プリント及びデジタルデータの寄託を受けた。版下プリントは当時のオリジナルで時代を反映した資料展示などには欠かせない貴重なものだ。

又、受け取ったプリントの約40％が記録されているデジタルデータは、今後の活用資料としての意味が大きい。

中国新聞社（広島）および広島平和記念資料館からは、原子爆弾が広島に投下された直後の1945年8月6日に撮影した写真原板の寄託を受けた。これらは被災した人間の惨禍や荒廃した街の様子が記録された映像として人類の重要な世界記録遺産と言っても過言でない。

又、利活用において特筆すべきことは、ケーブルテレビJ:COMとNHKなどのテレビに保存センター所有の写真が利用されたことである。それと中国新聞に保存センター事業に関する記事が掲載されたことなどがある。

徐々にではあるがメディアに注目されてきたことは、国立国会図書館が運営しているジャパンサーチのコンテンツに参加したことと合わせて、保存センターの存在と役割を世間に示す大きなステップとなった。

写真の映像記録は重要な歴史の証人であり、大事な文化財と言える。貴重な原板を見つけて収集し、劣化と散逸を防ぎ後世に伝えていくことは写真家の使命であり意義がある。

これからも社会に貢献する事業運営を心がけて行きたい。

田沼　武能（一般社団法人日本写真著作権協会会長）

目　次

1　はじめに …… 3

2　本調査の概要 …… 6

2.1　調査研究の目的 …… 6

2.2　調査研究の趣旨 …… 6

2.3　調査研究の内容 …… 6

3　本年度の調査研究の実施概要 …… 8

3.1　題目 …… 8

3.2　実施時期 …… 8

3.3　調査研究の内容 …… 8

4　業務実施体制と実施内容 …… 10

4.1　調査研究にあたる諮問・調査委員、補助員、調査員名簿 …… 10

4.2　課題項目別実施内容 …… 11

5　本年度収集・調査した写真原板について …… 12

5.1　本年度の写真原板の受入数及び保存庫入庫数 …… 12

5.2　本年度収集・調査した写真原板　総論 …… 15

5.3　調査した写真原板詳細 …… 18

6　写真原板データベースの開発 …… 21

6.1　本年度作業概要 …… 21

6.2　本年度作業詳細 …… 22

7　情報発信 ………………………………………… 30
7.1　本年度の情報発信と利活用 ………………………… 30

8　支援組織 ………………………………………… 35
8.1　支援組織設立の経緯と支援組織会員 ………………… 35
8.2　支援組織の沿革 ………………………………… 36
8.3　支援組織の支援内容について ……………………… 36
8.4　支援拡大の必要性について ……………………… 37

9　まとめ ………………………………………… 38

図　版 ………………………………………… 40

2　本調査の概要

2.1　調査研究の目的

わが国の時代を色濃く記録した歴史的あるいは社会的、芸術的に貴重な写真原板（フィルム及び乾板等）は、プリントと同様に時を経て価値をもった写真として評価される。しかし、これらは年月の経過とともに劣化、散逸、廃棄の危機に直面している。そのため、その写真原板の収集、調査を行い、後世に残していくための保存管理を図る。また、アーカイブ化して公開し、写真文化の振興と発展に役立てると同時に、社会文化の研究や学術、教育、マスメディア等における利用促進を図り、もって国民文化の向上に寄与することを目的とする。

2.2　調査研究の趣旨

日本の近現代が記録された写真には、今では見られない文化財や建物・風景、歴史的出来事や災害、また日本人の暮らしや日常、地域文化などの貴重な映像が残されている。そのため、時間的経過による写真原板の劣化が進んでいる1945年から1970年代の原板を重点的に収集することを方針とする。また、この時期の前後であっても撮影者の物故などによって散逸・廃棄の危機に直面した価値ある原板は積極的に収集を図る。

収集した写真原板は、インターネット上で閲覧できるようにするため、画像のデジタルデータ化を行うと共にデータベースに撮影者、撮影日時、撮影場所などの情報を記録する。原板自体は長期保存に適した包材に入れ替えて、最終的には国立映画アーカイブ相模原分館で保存する。

また、増えつつある写真の利用について、様々な分野や用途に対応できる画像データを作成・保管するための研究を進めるとともにデータベースの利便性向上を図っていく。

2.3　調査研究の内容

①諮問委員会の設置

調査研究を行うにあたり、写真史、フィルム保存技術、著作権権利処理、利活用、デジタルアーカイブに関わる専門家による諮問委員会を設置し、具体的な活動方針を図るための意見聴取を行う。

②写真原板の収集

日本写真家協会に設置した写真保存センター委員会により、写真原板の所有者の選定や収集の交渉を行う。

収集する写真原板は、撮影者、撮影日時、撮影場所などのメタデータが明確になっている写真集や雑誌、新聞等の印刷物および写真展などで発表された作品を中心とする。

所有者との権利処理は、日本写真保存センターへ著作権が譲渡される「寄贈」を原則としているが、状況によっては著作権が撮影者や所有者側に維持される「寄託」も受け入れる。

③写真原板の調査

収集した写真原板の情報管理を行うためのデータベースを構築する。

データベースは管理者用のデータベース（管理データベース）と一般者向けデータベース（閲覧データベース）に分けられる。管理データベースには、写真原板自体の劣化状態や画像点数、撮影者、撮影時期、撮影場所、使用された出版物などの情報を記録する。また、写真原板の画像のデジタルデータ化を行い、閲覧データベース（写真原板データベース）にて一般の方が閲覧できるようにする。画像公開にあたっては、著作権等の権利処理を行い、被写体の肖像権や所有権などの権利についても研究を進め、公正な公開基準の指針を構築する。

④写真原板の保存方法

写真原板の劣化状態を検査紙で確認したうえで、長期保存に適した中性紙の包材に入れ替え、フィルムの保存環境が整っている国立映画アーカイブ相模原分館のフィルム保管庫（125㎡×4部屋の合計500㎡、室温10℃、湿度40%RH）で保存する。

⑤写真原板の利活用

日本写真保存センターの活動内容を公開しているホームページと、調査した情報を公開している閲覧データベース（写真原板データベース）の認知度を上げていくための活動を行う。その一つとして、様々な資料を収集・公開している他の機関との連携を進め、保存センターが保有する写真を紹介する機会を増やしていく。また、より多くの写真家や分野の写真を見ることができるよう、閲覧データベースで公開する画像点数の増加を図ると共に、検索や閲覧システムの改良を進め、データベース利用者の利便性の向上を進めていく。画像データの利用貸出しにも積極的に取り組み、利用者の用途に合った画像データの作成とデータ保存方法について、作業方法の確立を進める。

3　本年度の調査研究の実施概要

3.1　題目

「文化関係資料のアーカイブの構築に関する調査研究」
（「写真フィルムの収集保存・活用に関する調査研究」を含む）

3.2　実施時期

令和３年４月契約締結日から令和４年３月31日まで

3.3　調査研究の内容

(1) 写真原板の収集

今年度は、コロナ禍の影響もあり当初計画どおりの収集はできなかったが、３名３団体からの原板資料収集を行った。個人では、和木光二朗より６回目の追加寄贈があり、新規で打田浩一（故人）、髙木康允（故人）の家族より寄贈があった。また、中国新聞社と広島平和記念資料館からは1945年８月６日、広島市に原子爆弾が投下された際に撮影された歴史的に貴重な写真原板の保存を依頼され、日本写真保存センターで預かることとした。

写真原板の関連資料として、岩波書店より『岩波写真文庫』が1950年代に出版される際に使用された版下プリントと、それをスキャニングしたデジタルデータ資料が追加寄託された。

(2) 写真原板の調査状況

写真原板の調査は、写真原板や資料を受取った時の整理状態や数量など全体を記録する「初期調査」と、その後に原板の一つ一つの詳細な状態を記録する「本調査」の２つがある。今年度調査を行った内容は以下のとおりである。

〇初期調査

恒成一訓、岩宮武二、写真協会、打田浩一、和木光二朗、稲越功一、大束元

〇本調査

岩波書店『奈良六大寺大観』を始めとする大観シリーズ、岩波書店『岩波写真文庫』、秋山忠右、西川孟、山﨑美喜男、髙田昭雄、島内英佑、渋谷高弘、中国新聞社、髙木康允、広島平和記念資料館

なお、本調査が完了した写真原板は国立映画アーカイブ相模原分館に入庫を行った。

(3) 写真原板のデジタル化の方法

写真原板のデジタル化は、出版物に使用されたコマだけでなくその前後に撮影されたコマも同時に記録するために、フィルムホルダー１本単位でスキャニングし、デジタル画像作成を行っている。このことは撮影者が現場でどのような行動をとったか、何を発見し、どんな感動を覚えたか等の状況を掴むことが可能になり、作家研究や作品の制作過程の調査に役立つ。

調査で使うデジタルデータの作成にはフラットベッドスキャナーを使用しているが、画像の利活用ではさらなる高精細画像の要望が多い。様々な利用用途に対応できるよう、１コマ単位の高精細な画像データを作成・保存する方法の研究を今年度より開始した。

(4) データベースの改修

現在運用しているデータベースは、凸版印刷株式会社が開発した収蔵資料・書籍管理サービス「SAI-CHI」をプラットホームとして、平成26年度から順次改修を進めながら使用している。

今年度は写真原板の撮影地や権利に関する情報をより正確に管理できるようにした。それ以外にも公開している画像への利用の問い合わせを簡略化し利活用しやすいようにした。

(5) 写真原板の利活用と広報活動

写真原板の調査内容を公開している閲覧データベース（写真原板データベース）の閲覧数はここ数年で着実に増えてきた（詳細：7.1.2.2）。閲覧数が増えた原因の一つとして閲覧データベースで公開している原板数が増加したことが考えられる。閲覧データベースで公開している原板の数は、2年前の2020年3月末時点で6,753点、昨年3月末で13,099点、2022年3月はじめには20,413点にまで増加した。ここ数年で公開している原板数が急激に増えた理由としては特に数年間続けてきた岩波写真文庫の調査が進んだことが挙げられる。岩波写真文庫は様々なジャンルの被写体を記録しており、閲覧データベースの公開数だけでなく内容も充実したものとなってきた。また、閲覧データベースは国立国会図書館が運営しているジャパンサーチと連携しており、そちらからの流入閲覧者が多いことも閲覧数増加の原因として考えられる。

公開画像の新しい見せ方として今年度からジャパンサーチ内で記事を作成できる機能「ギャラリー」を活用し、保存センターが公開している画像から記事作成することを始めた。写真を見る楽しみ方の一つとして、今後も継続して様々なテーマを取り上げて写真を紹介する予定である。

画像データの利用に関しては前年度同様に出版社からの出版物掲載やイベント、写真展での展示、テレビ番組での放送など多岐に渡ってあった。特にNHKのスペシャル番組で太平洋戦争開戦前に関する画像14点が利用されたことは、保存センターが貴重な写真原板を保有していることが認知されつつある証だと言える。

一方、利活用促進のための対外広報活動については新型コロナウイルス感染者拡大により、保存センター主催で計画していたセミナーは中止したが、国立国会図書館が主催するジャパンサーチのオンラインセミナーに参加した。

飯島　幸永（公益社団法人日本写真家協会理事）

4　業務実施体制と実施内容

4.1　調査研究にあたる諮問・調査委員、補助員、調査員名簿

事業実施組織
　公益社団法人日本写真家協会

統括部門
　代　表　　田沼　武能（一般社団法人日本写真著作権協会会長
　　公益社団法人日本写真家協会名誉会員・名誉会長）
　　野町　和嘉（公益社団法人日本写真家協会会長）
　　松本　徳彦（公益社団法人日本写真家協会名誉会員）
　　山口　勝廣（公益社団法人日本写真家協会副会長）
　　飯島　幸永（公益社団法人日本写真家協会理事）
　　瀬尾　太一（一般社団法人日本写真著作権協会常務理事）　令和３年７月14日逝去

諮問・調査部門
諮問・調査委員会
　委　員　　北村　行夫（虎ノ門総合法律事務所・弁護士）
　委　員　　大亀　哲郎（日本ユニ著作権センター企画室主任研究員）
　委　員　　高橋　則英（日本大学芸術学部特任教授）
　委　員　　多田　亞生（元岩波書店美術書編集者）
　委　員　　谷　昭佳　（東京大学史料編纂所技術専門職・写真史家）
　委　員　　田良島　哲（東京国立博物館 特任研究員）
　委　員　　丹羽　晴美（東京都現代美術館事業企画係長）
　委　員　　丸川　雄三（国立民族学博物館人類基礎理論研究部准教授）
　委　員　　山口　孝子（東京都写真美術館保存科学専門員）
　補助員　　内堀　タケシ（公益社団法人日本写真家協会会員）
　補助員　　寺師　太郎（公益社団法人日本写真家協会会員）

調査作業部門
　事務局長　　山崎　正典
　調査員　　河原　健一郎
　調査員　　幸田　沙也子
　調査員　　鈴木　博憲
　調査員　　髙田　しのぶ
　調査員　　中辻　利枝子
　調査員　　笛木　諭
　調査員　　渡邊　英雄

4.2　課題項目別実施内容

実施月	事項	概要	詳細
4月	収集	写真原板の収集	和木光二朗
	会議	関係者合同会議	収集目標とする写真家の協議
	収集	写真原板の収集	打田浩一
	権利処理	寄贈契約の締結	打田浩一
	会議	諮問調査委員会	令和２年度事業報告・令和３年度年間計画
	会議	支援組織	令和２年度事業報告・令和３年度年間計画
５月	調査	原板保管の見直し	共進倉庫冷蔵保管庫の視察・調査
６月	広報	セミナー参加	「ジャパンサーチ」連携事例紹介
	保存	写真原板の収蔵	国立映画アーカイブ相模原分館フィルム保存庫への収蔵
	会議	写真保存センター委員会	令和３年度保存センター運営方針と委員役割分担の確認
７月	会議	データベース	令和３年度データベース改修項目の協議
８月	会議	利活用	テレビ番組での写真原板利用について制作会社と協議
	調査	利活用	高精細画像データ作成に関するテスト
	会議	写真保存センター委員会	収集目標とした写真家との交渉状況の確認
９月	会議	関係者合同会議	広島原爆写真の収集方法
	調査	利活用	高精細画像データ作成に関するテスト
	会議	諮問調査委員会	令和３年度上半期報告・下半期の計画
	会議	支援組織	令和３年度上半期報告・下半期の計画
10月	収集	写真原板の収集	中国新聞社
	権利処理	寄託契約の締結	中国新聞社
	保存	写真原板の収蔵	国立映画アーカイブ相模原分館フィルム保存庫への収蔵
	収集	写真資料の収集	岩波書店『岩波写真文庫』
	権利処理	寄託契約の締結	岩波書店『岩波写真文庫』
11月	会議	関係者合同会議	画像データ利用貸出しの問合せ方法協議
	収集	写真原板の収集	髙木康允
12月	会議	関係者合同会議	高精細画像データ保存方法の検討
	権利処理	寄贈契約の締結	髙木康允
	広報	利活用	ジャパンサーチ・ギャラリーへの情報掲載
１月	会議	関係者合同会議	高精細画像データ保存方法の検討
	広報	利活用	ジャパンサーチ・ギャラリーへの情報掲載
	会議	写真保存センター委員会	写真原板データベースでの画像公開基準の検討
２月	収集	写真原板の収集	広島平和記念資料館
	権利処理	業務委託契約の締結	広島平和記念資料館
	会議	データベース	データベース改修作業
３月	広報	利活用	ジャパンサーチ・ギャラリーへの情報掲載
	保存	写真原板の収蔵	国立映画アーカイブ相模原分館フィルム保存庫への収蔵
	報告	報告書作成	令和３年度事業報告

山崎　正典（事務局長）

5　本年度収集・調査した写真原板について

5.1　本年度の写真原板の受入数及び保存庫入庫数

5.1.1　受け入れた写真原板資料の概要

本年度は６名・団体、2,459点の写真原板資料を受け入れた。写真原板資料の概要は表１の通り。受入数は初期調査時の概数で記す。

表１　令和３年度写真原板資料受入概要

撮影者・団体名	受入日	受入数		概要
		初期調査未点数	初期調査済点数	
和木光二朗	2021年４月２日	―	268	人形劇、特撮、芸能人の舞台裏や1960～80年代の世相・ブームなど
打田浩一	４月８日	―	1,387	比叡山千日回峰行
中国新聞社	10月８日	―	7	広島原爆投下当日の様子など
岩波写真文庫	10月26日	―	513	『岩波写真文庫』の書籍の制作に関する原板資料
髙木康允	11月25日	―	279	『出会いの顔』『ふだん着の大臣たち』などのポートレート
広島平和記念資料館	2022年２月10日	―	5	広島原爆投下当日の様子など
合計６名・団体		―	2,459	

5.1.2　保存庫へ入庫した写真原板の概要

本年度の国立映画アーカイブ相模原分館フィルム保存庫への写真原板の入庫作業は2021年6月29日、10月21日、2022年3月8日の3回行い、計18,244点を収めた。写真原板の入庫内容は表2の通り。

表2　令和３年度写真原板入庫内容

撮影者名	入庫原板数
佐伯義勝	13
秋山忠右	1,751
岩波写真文庫	6,681
西川孟	3,012
山﨑美喜男	4
大和古寺大観	3,813
醍醐寺大観	84
平等院大観	1,008
髙田昭雄	258
島内英佑	305
中国新聞社	7
渋谷高弘	571
清宮由美子	732
広島平和記念資料館	5
合計14名・団体	18,244

5.1.3　年度別各作業処理数

日本写真保存センターはこれまで87名・団体、約347,137点の写真原板資料を受け入れた。そのうち国立映画アーカイブ相模原分館フィルム保存庫へ収めた写真原板は130,521点。調査中・未処理の写真原板は216,616点。年度別の各作業処理数は表３の通り。また、調査を開始してから現在までにデジタル化した写真原板の数は65,035点になった。

表３　年度別各作業処理数（2022年３月８日現在）

年度	写真原板受入数	相模原入庫数	調査中・未処理数	デジタル化した写真原板数
平成21年度	28,712	—	28,712	4,775
平成22年度	25,626	—	54,338	1,369
平成23年度	41,203	—	95,541	6,988
平成24年度	4,470	8,901	91,110	2,208
平成25年度	3,523	15,139	79,494	2,560
平成26年度	40,258	24,179	95,573	4,038
平成27年度	61,523	7,210	149,886	5,062
平成28年度	11,000	5,263	155,623	4,372
平成29年度	91,551	9,229	237,945	3,969
平成30年度	343	12,608	225,680	2,739
令和元年度	24,229	8,501	241,408	2,782
令和２年度	12,240	21,247	232,401	11,154
令和３年度	2,459	18,244	216,616	13,019
合計	347,137	130,521	216,616	65,035

笛木　諭（調査員）

5.2　本年度収集・調査した写真原板　総論

5.2.1　中国新聞社松重美人（1913～2005）撮影のヒロシマ原爆被災状況の写真原板について

人類史上初めて実戦使用された原子爆弾は、テニアン基地を発進した米軍機エノラ・ゲイ号によって1945年8月6日午前8時15分、広島市上空でウラン235原子爆弾を爆発させ、市街の大部分と13万人以上の死傷者を出す甚大な被害をもたらした。その悲惨な状況を記録したのが当時中国新聞社の写真部員で中国管区司令部報道班員だった松重美人で、彼がマミヤシックスカメラ（ブローニーフィルム12枚撮りの蛇腹式）で撮影した写真原板が、中国新聞社に残されている。被爆直後の傷ついた市民や熱線を浴びて火傷した女学生たちと救護する警官、倒壊した家屋や消防署などを撮った写真5点がある。この6×6判5点の写真原板は2021年3月26日、広島市教育委員会が市の重要有形文化財として恒久的な保存を指定した。

これは写真とは何かということと同義で、写真のもつ意味合い、いわゆる写真本来の「記録する力」をもっと前面に出して「事実はこうだった」と訴えることの大切さを言っているように思う。さらにこのことは日本写真保存センターの理念でもある「記録の大切さ」に通じるものである。

ヒロシマの写真は、暫くGHQのプレスコードで公開禁止であったが、初出は1946年7月6日付の『夕刊ひろしま』で、2枚の写真が掲載された。米軍の占領が終わった1952年9月29日号『LIFE』誌では「米国初公開」の見出しで2枚が掲載されている。

収集にあたっては、撮影フィルムの支持体が可燃性の硝酸セルロース（ナイトレート）でないことの確認を東京都写真美術館の山口孝子保存科学専門員のもとで行い、劣化も少なく長期保存に耐えると判断し収集することにした。

2021年10月8日中国新聞社岡田浩一編集局次長が写真原板を保存センターに、1945年8月6日撮影の原板5点と、新たに発見した10点の原板（フィルム5点、ガラス乾板4点、デューブ1点）の計15点を持参され、寄託として受け入れた。収集した原板は直ちに長期保存に適した中性紙のホルダーおよび保存箱に収めて、国立映画アーカイブ相模原分館に保存した。

参考資料：中国新聞（2020～21年）、広島平和記念資料館資料調査研究会の研究報告（第4号平成20年3月）

5.2.2　広島平和記念資料館所蔵のヒロシマ原爆被災状況を記録した写真原板について

広島平和記念資料館には原爆被災に係る様々な資料が収集され、保存調査をして一般公開されている。その中より、8月6日の原子爆弾投下直後の立ち昇る原子雲や10月の被災状況を記録した3名の方々の写真原板26点が、2022年2月10日、保存センターに寄託された。

撮影日順に記載すると、8月6日投下約5分後の原子雲を木村権一（当時の所属、陸軍船舶司令部）が6×6判ネガで6枚、深田敏夫（中学生、陸軍兵器補給廠で被爆）が投下約5～10分後の原子雲を小西六のベビーパール3×4判ネガで4枚、林重男（学術調査団撮影班）は10月1～10日東京から広島に入り、6×6判カメラで被爆地一帯を爆心地北西の広島商工会議所、旧中国新聞社屋上からネガ16枚で360度パノラマ状に撮影した。林には今回寄託分のほかに35ミリネガ233点が資料館に残されている。

寄託された写真原板は後に保存センターのホームページでも公開し、一般への利用閲覧の供に応じ活用することになる。そのため、資料館作成の情報や高精細のデジタル画像データも共用する業務委託契約を結ぶ。

今回の写真原板の保存は、当保存センターの所蔵設備及び管理状況を評価したうえでの業務提携であり、今後、各地の資料館等との写真原板の保存業務委託が増えるきっかけになるかもしれない。これに伴う契約約款の改定も必要になり、令和４年度の新しい活動の重要事項として整備が必要となる。

保存の立場から言えば、高精細なデータとプリントの制作支援や世界各国での写真展示活動の財政的援助もお願いしたい。

また、保存センターが2013年に寄託収集した山端庸介（西部軍報道班員1917～1966）が撮影した「ナガサキの原爆写真」とともに、国はユネスコの世界記憶遺産に登録することも検討してほしい。

写真原板については、ヒロシマ、ナガサキの原爆被災記録として、その実態を後世に伝え史実の凄惨な実態とともに、記憶遺産として残す責務があることを認識し、それ相応の人的、財政的支援の増強を願いたい。

松本　徳彦（公益社団法人日本写真家協会名誉会員）

5.2.3　打田浩一　写真家（2020年逝去・63歳）

写真家は、深く感動した被写体に出会った時、乾坤一擲の大きな仕事をすることがある。京都在住の打田浩一は、東に望む比叡山延暦寺の光永覚道阿闍梨にふとした縁で話す機会を得て強く惹かれた、という。阿闍梨の言葉を引用すると、‘彼の態度は、回峰行の本来の意味をまことによく理解し、終始変わらぬ真摯なものであった’、という。以後阿闍梨の日常身辺を撮影するようになり、その過程で1987年（昭和62年）3月から、平安時代から優に千年を超える‘荒行’の千日回峰行を続ける光永覚道阿闍梨に、打田自ら行者のようになって同行しその姿を追った。その成果を満行の４年後、カラー写真集『回峯行』（春秋社1994年刊）と題して発表した。

その後直ちに弟子の光永圓道阿闍梨の回峰行も12年にわたり同行し、モノクロ写真集『比叡山千日回峰行』（春秋社2016年刊）と表して上梓している。一人の行者でも同行撮影することは大変な仕事であるが、打田は、師匠、弟子と二人の回峰行を通算17年に渡り壮大な記録映像の撮影をやり遂げ、２冊の作品集を完成させた。

一般的に「回峰行」は深夜にわたって比叡山山中の約30キロを千日間歩く「歩行禅」として理解されているが、本質は「礼拝行」である。深夜２時、延暦寺根本中堂に礼拝供華したのち暗闇の比叡山野にある260ヶ所のお仏堂、野仏、石仏などを不動明王の真言（マントラ）を唱えながら提灯一つで礼拝して回るところにある。第七百日満行後には、九日間、断食、断水、不眠、不臥の状態で本尊大聖不動明王と一体にならんがために行ずる明王堂参籠（堂入り）があり、再び生き仏となってこの世に出現する壮絶な修行である。この難行苦行の全行程を打田は、行者に密着しながら撮影し、「回峰行」の本質を記録と映像美で迫った。

師匠の光永覚道阿闍梨のカラー写真集には、深夜、霧に霞む幻想的な行者道をサッ、サッ、サッ、サッと足早に歩いていく姿を追ったり、ある時は雪の中であったり、ある時は雨に打たれた姿を、ある時は前に歩き、ある時は後ろに下がり闇に消えていく姿を捉えている。レンズは木々の中から大股で歩

く剽悍な白装束（死出の姿）も捉えている。そして打田の眼は朝霧の冷気に包まれて咲く純白のヤマユリを見つけ、清々しい気持ちでシャッターを切っている。山川草木悉皆成仏が天台宗の教えであることを打田は楚々とした野花に見つけている。カメラワークは、極力ストロボを弱く使用し、自然光と阿闍梨の持つ提灯の薄ぼんやりとした灯で表現しているだけの写実的ドキュメンタリー写真で、そこにはテクニックを超えて肉薄していこうとする打田がいる。

夜が明けるころ、京都切廻り、という行者と民衆との祈りの姿も撮影している。道端で跪き悩みを背負う衆生一人一人に、行者が語り掛けるように腰を曲げ、祈りを捧げる姿が捉えられている。民衆救済が究極の目的である仏道がそこにある。そのあと打田は、人智を超えた九日間の不眠不休の「堂入り」の最中に水汲みに出る骨と皮だけになった白装束の阿闍梨を見て、涙があふれた、と感動しながらも壮絶な修行の姿を撮影している。

一方、弟子の光永圓道阿闍梨の写真集はモノクロで取り組んでいる。1990年2月、15歳であった少年の得度式の撮影依頼を受けて出会ったのがきっかけで光永圓道僧侶になった少年の「回峰行」を1997年より12年間、打田本人も得度までして撮影に入るのである。少年から青年、壮年へと年を重ねていく圓道僧侶とともに打田も青年から、壮年へと年を重ねていく長い撮影行脚であった。

モノクロで表現された行者の姿は、カラーと違って水墨画に似た重厚な黒と白の美しさが全体に流れ、シルエットで表現された祈りの横顔などは、心象美ともいうべき神秘な精神性が漂っている。深みある黒と白の諧調は、荒行の苦しみや修行の厳しさに耐え、仏の教えに帰依し、苦しみを乗り越えようとする人間の美しくも不可思議な存在を伝えている。この師匠と弟子の「回峰行」に通算17年の歳月をかけ同行撮影した打田自身、生きるとは何か、を求めた求道者ではなかったか。この大きな仕事を成し遂げて、打田は令和2年この世を去るのである。享年63歳であった。

日本写真保存センターでは、この比叡山延暦寺天台仏教の教えを具現化したともいえる修行のカラー写真集『回峯行』とモノクロ写真集『比叡山千日回峰行』の原板約1,300本の寄贈の申し入れが奥様からあり、記録された内容の深さと歴史的、文化的見地からその貴重な資料的価値を判断し受け入れたものである。

飯島　幸永（公益社団法人日本写真家協会理事）

5.2.4　髙木康允　元日本写真家協会会員（2019年逝去）

髙木康允の代表作としては『ふだん着の大臣たち』『出会いの顔』などが挙げられる。『ふだん着の大臣たち』では大平正芳内閣総理大臣が着物姿で体操をする姿や、各時代の大臣たちがそれぞれ、ゴルフ、囲碁、パチンコをしたり、ペットや家族と一緒の姿など、趣味に興じて楽しげに笑顔を見せる様子などをフィルムに収めた。国会や新聞、TVなどで見せる硬い顔つきばかりではない柔らかな表情は、時に、見る者に人間らしいところもあるのだと安心させる。これは撮影をしている髙木が彼らの懐に入り被写体である大臣たちから信頼されていた証でもあるのだろう。竹下登、小沢一郎、安倍晋太郎など記憶に残る政治家も収めている。

『出会いの顔』では政治家も含め作家や俳優、など有名人の何気ない横顔や気負わない表情も捉え、人物の見たことのない一面が感じられる。

これらの人物写真は髙木流と言っても良いのか、髙木ならではの写真を撮るセンスを感じる。

内堀　タケシ（公益社団法人日本写真家協会会員）

5.3　調査した写真原板詳細

5.3.1　新規受け入れ

打田 浩一（うちだ こういち）1957（昭和32）年－2020（令和2）年　京都生まれ

1978年、大阪写真専門学校卒業。1984年、スタジオ・ヴァンブー設立に参加。雑誌、カタログなどの広告写真に携わる。2008年、打田写真事務所設立。京都の町並みや、ブルースミュージシャン、比叡山千日回峰行を撮り続ける。

主な写真集：『光永覚道阿闍梨写真集　回峯行』（春秋社 1994年）、『比叡山千日回峰行－光永圓道阿闍梨写真集』（春秋社 2016年）。

主な写真展：「回峯行」（ぎゃらりい西利 1998年）、「LIVE IN JAPAN」（PARKER HOUSE ROLL 1999年）、「CHICAGO CLUBS」（PARKER HOUSE ROLL 2001年）。

写真原板の特徴

○受入日と原板の数量

2021年4月8日に、135判カラーポジを中心に、1,387点を受け入れた。

○原板の内容

『光永覚道阿闍梨写真集　回峯行』（春秋社、1994年）に関するものが約600点、『比叡山千日回峰行－光永圓道阿闍梨写真集』（春秋社、2016年）に関するもの約700点。

○原板の状態

目立つ劣化は見当たらなかった。

中国新聞社（ちゅうごくしんぶんしゃ）1892（明治25）年　広島で創業

1892年、日刊『中國』として広島市大手町（現・中区大手町２丁目）で創刊。1908年、紙齢５千号を記念し、題字を「中國新聞」と改める。1945年８月６日、広島に原爆が投下され本社も被災。他の新聞社に代行印刷を依頼し、２日休刊しただけで９日付から発行。2021年現在、発行部数53万部。

主な受賞：新聞協会賞（1990年）「世界のヒバクシャ」、新聞協会賞（2020年）「ヒロシマの空白」。

写真原板の特徴

○受入日と原板の数量

2021年10月8日に、120判モノクロネガ３点11コマ、ガラス乾板４点４コマの、計７点15コマを受け入れた。

○原板の内容

全て広島原爆の被害状況が写されたもので、原爆投下当日に撮影されたものも含まれる。

○原板の状態

汚れ、変色、銀鏡などの経年劣化が全ての原板に発生していた。また原板の端の部分の乳剤が剥離しているものや、ガラス乾板には角の１カ所が割れているものがあった。

髙木 康允（たかぎ やすのぶ）1935（昭和10）年－2019（平成31）年　東京生まれ

日本大学芸術学部在学中より長野重一氏に師事。1959年、日本大学芸術学部卒業。東京新聞社、週刊東京写真部に勤務。1960年、フリーランスとなり政府広報、月刊誌、週刊誌のグラビアを撮影。1966年、朝日ジャーナル『一億人の島』『開かれた世代』連載に携わる。1990年、天皇即位の礼、公式記録を担当。日本写真家協会会員、日本写真協会会員、日本芸術学会会員、新写真派協会会員、NHKオープンスクール講師等を歴任。

主な写真集：『ふだん着の大臣たち』（JCIIフォトサロン、1994年）、『出会いの顔』（髙木康允、2005年）。

主な写真展：「出会いの顔」（銀座ニコンサロン 1979年）、「マスイメージ日本」（コニカプラザ 1991年）、「東京オリンピックの時代」（JCIIフォトサロン 1992年）、「ふだん着の大臣たち」（JCIIフォトサロン 1994年）。

写真原板の特徴

○受入日と原板の数量

2021年11月25日に、135判モノクロネガを中心に、279点を受け入れた。

○原板の内容

『ふだん着の大臣たち』（JCIIフォトサロン、1994年）に関するものが7割、『出会いの顔』（髙木康允、2005年）に関するもの3割。ほぼすべての原板が書籍に使用されている。

○原板の状態

目立つ劣化は見当たらなかった。

広島平和記念資料館（ひろしまへいわきねんしりょうかん）1955（昭和30）年　広島で開館

1955年8月24日、広島にて開館。市民有志の団体である原爆資料集成後援会をはじめ市民の協力のもと、原爆被害に関する資料を多数収集。1994年、「平和記念資料館東館」を開館。2006年、本館建物が戦後建築として初めて国の重要文化財に指定される。

写真原板の特徴

○受入日と原板の数量

2022年2月10日に、120判モノクロネガ4本22コマ、ベスト半裁判1本4コマの、合計5本26コマを受け入れた。

○原板の内容

1945年8月6日の原爆投下直後より1945年10月10日までの間に撮影された広島原爆被害の様子。

○原板の状態

一部にカーリング、銀鏡が見られる。

5.3.2　受入継続中の写真原板詳細

昨年度までに受け入れた写真原板のうち、本年度も引き続き受け入れを行った写真原板について記す。写真家のプロフィールは前年度までの報告書にて記載済みのため、写真原板の特徴のみを記す。

和木 光二朗（わき こうじろう）

写真原板の特徴

○受入日と原板の数量

2021年4月2日に、135判モノクロネガを中心に、268点を受け入れた。

○原板の内容

劇団ひとみ座による人形劇「ひょっこりひょうたん島」、円谷プロダクションの「ウルトラマン」、欽ちゃんのどこまでやるの！、キャンディーズなどの舞台裏の様子が写されたものが約20点。それ以外に毎日グラフでの仕事だと思われる1960～80年代の日本の世相・ブームを写したものが約240点。

○原板の状態

数点の原板にビネガーシンドロームによる軽度の波打ちが発生していたが、それ以外に大きな劣化は見当たらなかった。

岩波写真文庫（いわなみしゃしんぶんこ）

写真原板の特徴

○受入日と原板の数量

2021年10月26日に、プリント287箱、原板225点、ハードディクス1点の合計513点を受け入れた。

○原板の内容

『岩波写真文庫』の刊行にあたって作成された284冊分の版下プリントおよび原板。ガラス乾板15点を含む原板計225点は、主に『岩波写真文庫』に使用された原板のデューブ等であった。ハードディスクの内容は『岩波写真文庫』全286冊・約53,000点のデータのうち、171冊・21,697点分の版下プリントスキャンデータで、主に『新風土記』等、地誌的な内容に関するものであった。

○原板の状態

一部の原板に銀鏡が見られた他、ガラス乾板に割れが見られた。

河原 健一郎（調査員）

笛木 諭（調査員）

6　写真原板データベースの開発

日本写真保存センターでは歴史・文化的に貴重な場面を記録した写真原板を後世に残すために写真原板の収集・調査・保存・利活用を行っている。これらの作業を効率的に行えるように写真原板データベース（以下DB）の開発と運用を行っている。

日本写真保存センターの写真原板DBは２つ存在する。１つは管理DB。これは写真原板に関する情報を記録するDB。管理DBで扱う情報は資料受入日、著作権、撮影者名、数量、サイズ、種別、撮影地、撮影日、劣化状態、個包材の書き込み、現在の保管場所、使用された画像のタイトル、写真原板の画像、被写体分類、掲載された印刷物のタイトル等々。様々な形態の写真原板に対応できるように数多くの項目が存在する。もう１つは閲覧DB。こちらは調査した写真原板のなかでこれまでに書籍や展覧会で公表された原板情報をウェブ上で閲覧できるようにしたDB（https://photo-archive.jp/database/）。管理DBでは数多くの項目が存在し、そのなかには個人情報などウェブ上で公開できない情報が存在する。そのため閲覧DBで扱う情報は撮影者名、サイズ、種別、撮影地、撮影日、公表された画像のタイトル、写真原板の画像、掲載された印刷物のタイトル、被写体分類等、管理DBの情報から公開に適した一部の項目のみとした。この２つのDBの開発は凸版印刷株式会社が提供しているデータベースシステム「SAI-CHI」を利用している。

管理DBは2015年度に基本的な部分の開発が終了（詳細は平成27年度報告書）。2017年度に岩波書店から受入れた大量の写真原板の調査を始めたところ、これまでの管理DBの構造では撮影者の情報の管理が難しいということが判明した。そのため、2018年度に管理DBの大幅な改良を行なった（詳細は平成30年度報告書）。その後も実際に行った原板調査でのDBの使用感を検証し必要な部分の改良を毎年行なっている。

閲覧DBは2016年12月からウェブ公開を始めた。閲覧DBも管理DBの改良に伴い表示項目の改良を逐次行なっている。

6.1　本年度作業概要

本年度も引き続き実際の原板調査作業でデータベースの使用感を検証し、必要な部分の改良を行なった。

1）写真原板の情報をより正確に管理するためにDBの項目の追加
・受取った写真原板資料の数量と種類を明確にするために行なう初期調査でこれまでになかった5×7サイズの項目を追加
・写真の撮影場所を市区町村より細かく記録できるように緯度経度の項目を追加
2）様々な写真原板の権利表示に対応できるように公開設定の項目の追加と動作変更
・他機関から寄託された写真原板の権利に関して公開DBで正しく表記するために寄託資料の権利表示に関する項目の追加と動作変更
3）入力内容の確認作業の効率を向上するためにインターフェースの一部を変更
・重要度が高い項目を表示しているDBの一覧項目へ「撮影者」を追加

これらの改良によりさらに正確で迅速な情報管理が可能になった。改良作業の詳細については6.2本年度作業詳細で紹介する。

笛木 諭（調査員）

6.2 本年度作業詳細

6.2.1 日本写真保存センターデータベース開発について

昨年度は、一昨年度の開発内容をベースに効率化と正確な情報管理を目的とした検討、開発項目の選定を行い、主にストレッジボックス関連の入力負荷の改善等の開発を行った。

今年度は、昨年度実施できなかった検討内容をベースに、引き続き運用上の効率化と正確な情報管理を目的とした検討、開発項目の選定を行い、開発を行った。

6.2.2 管理データベースの開発について

管理データベースについて、効率化と正確な情報管理を目的とした検討を行った結果、一部項目に関して改良していくべき点が出てきた。

日本写真保存センターと細かく協議をし、実際に改良すべき項目とそうでない項目をより分け、また、実装方法の検討を行い、開発を行った。

6.2.2.1 改良点

下記の点について、改良が必要となった。

（ア）ホルダー一覧、コマ一覧に撮影者を表示：

撮影者情報は閲覧データベースで重要な部分のうちの一つであり、ホルダーマスターやコママスターで登録した撮影者のデータに抜けや間違いがないかを確認する必要がある。現在、確認を行うには、一つ一つ各マスターを開いて撮影者タブを選択して情報をみなければならないため内容確認に時間がかかっている。今後の撮影者情報の確認作業を簡略化するために撮影者情報をホルダー一覧、コマ一覧の項目に追加して表示する改良を行った。

（イ）所蔵項目の自由記述対応：

これまで閲覧データベースの所蔵の項目は寄贈資料では「日本写真保存センター」とし、寄託資料では空欄にしていた。最近は寄贈資料だけでなく寄託資料も増えてきたため、これまでよりも所蔵先情報を詳細に管理し、閲覧者に正しい情報を届ける必要がある。寄贈資料に関してはこれまで通り「日本写真保存センター」とし、それ以外の寄託資料に関しては空欄か自由記述するため、管理データベースで所蔵欄の入力に対応した。

（ウ）緯度経度を登録できる項目を追加：

写真原板資料の特徴として、ある一地点で作成（撮影）されたことが細かく特定可能であるという点が挙げられる。写真原板に特有のメタデータをより詳細に記録するため、コママスターの撮影場所に緯度経度情報の入力欄を追加した。

（エ）受入情報の項目追加：

受入情報の項目に「5×7カラーポジ」「5×7カラーネガ」「5×7白黒ネガ」を追加した。

6.2.2.2　開発内容の定義

(ア) ホルダー一覧、コマー覧に撮影者を表示

資料群名と資料群番号の間に、撮影者名として表示する項目を設けた。撮影者名は複数の選択が可能なため、「、」区切りで複数撮影者を表示することとした。

	資料群名	撮影者名	資料群番号	ホルダー番号	コマ番号	画像	シリーズ名	タイトル	撮影年月日	撮影場所	操作
☐	(資料群)大東元	大東、吉田　潤、田中　徳太郎、野水　正朔、内山　林之助、名取　洋之助、米田　太三郎、奈良国立文化財研究所、便利堂、東博、岩下　平三、長野　重一	0	0001-0002	00001-00002-0001			死の街の記録	1962//~//	日本	コママスター ホルダーマスター コマ削除
☐	(資料群)大東元	大東	00001	00001-00003	00001-00003-0001			死の街の記録	1962//~//	日本	コママスター ホルダーマスター コマ削除

図１　ホルダー一覧

	資料群名	撮影者名	資料群番号	ホルダー番号	仮箱	資料種別	原板種別１	原板種別２	原板種別３	原板種別４	原板サイズ区分１	原板サイズ区分２
☐	(資料群)大東元	大東、吉田　潤		00001-00001	仮箱不明	写真原板		撮影原板	白黒	ネガ	135	35mm判
☐	(資料群)大東元		00001	00001-00002	仮箱不明	写真原板		複製	白黒	ネガ	大判	4×5判
☐	(資料群)大東元		00001	00001-00003	仮箱不明	写真原板		複製	白黒	ネガ	大判	4×5判

図２　コマー覧

これにより、今まで、マスターボタン押下→画面移動→撮影者タブ押下のアクションを必要としていた確認が不要となった。

(イ) 所蔵項目の自由記述対応

コママスターの詳細タブ内、名称の下部に所蔵入力欄を設け、内容を記述できるようにした。入力できるのは、寄贈以外の場合に限るため、資料群マスターの受入情報の受入方法項目で「寄贈」が選択されている場合は、グレーアウトで入力できないようにした。

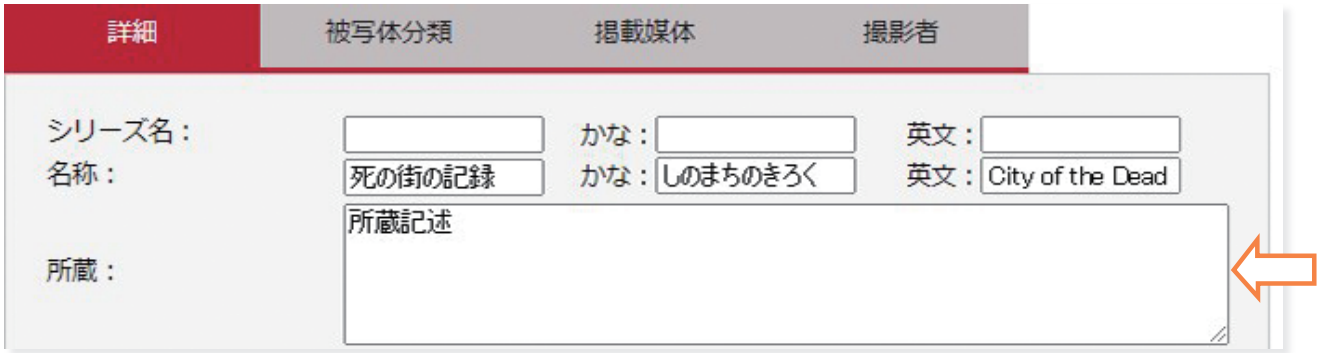


図３　コママスターの詳細タブ画面（所蔵入力可能時）

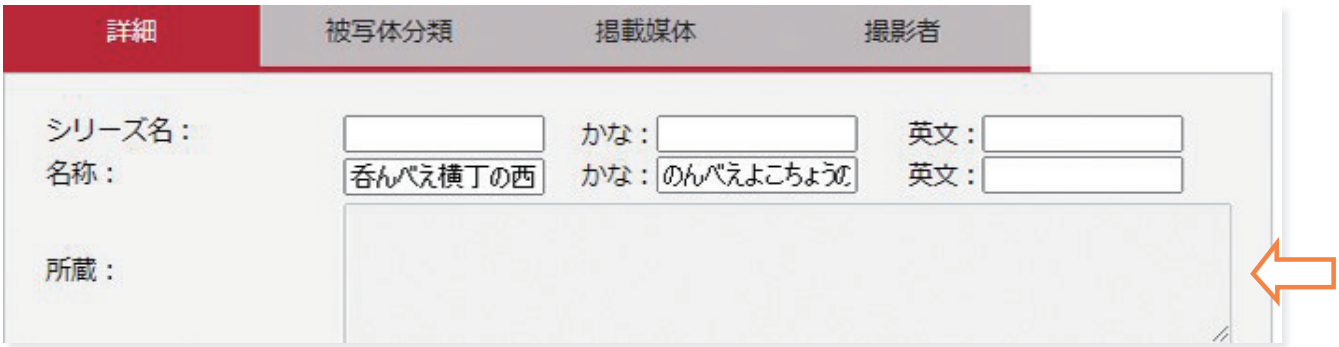


図４　コママスターの詳細タブ画面（所蔵入力不可時）

また、この情報を閲覧データベースに出力する対応を行い、これにより閲覧データベースでの詳細な所蔵情報の表示に対応できるようにした。

（ウ）緯度経度を登録できる項目を追加

コママスター内撮影場所の都道府県の下部に緯度経度入力欄を新たに設けた。入力は直接入力とし、入力の値は世界測地系の60進数の度表記をつなげて値のみを入力することを想定した。

参考：世界測地系の導入に関して　国土地理院

https://www.gsi.go.jp/LAW/jgd2000-AboutJGD2000.htm

図５　コママスターの撮影場所入力画面

また、この情報を閲覧データベースに出力する対応を行い、これにより閲覧データベースでの緯度経度情報の表示に対応できるようにした。

（エ）受入情報の項目追加

資料群マスター登録画面の受入情報の初期調査票内項目に「5×7カラーポジ」「5×7カラーネガ」「5×7白黒ネガ」を追加した。また、累計情報表示項目にも追加を行った。

図６　資料群マスターの受入情報画面（仮箱調査票入力）

図７　資料群マスターの受入情報画面（資料群累計表示）

6.2.2.3　管理データベースの今後について

今回の対応で昨年度からの課題となっていた運用、機能面での一定の改善、安定化が見込まれるため、管理データベースの今後としては、さらに運用、機能面で、以下の課題への対応展開が考えられる。

・受入情報管理拡充
・保管情報管理拡充
・管理用データベースから閲覧用データベースへのデータ更新機能の付加
・他館連携に伴うデータベース構造の検討
・業務従事者の作業効率化

6.2.3　閲覧データベースの開発について

昨年度は公開方法の多様化に伴う画面の対応と、運用利便性の向上のための開発を行った。

今年度も、引き続き公開方法の多様化に伴う画面の対応と、運用利便性の向上のための開発を行った。

6.2.3.1　改良点

下記の点について、改良が必要となった。

(ア)「掲載写真のご利用について」ボタンの設置：

閲覧データベースで公開中の画像について、円滑な利活用を図ると共に、より詳細な利用ルールの周知が必要となった。閲覧データベース掲載画像を利用したい閲覧者にとって分かりやすく周知を行うため、「掲載写真のご利用について」ボタンの追加を行った。

(イ) 緯度経度の表示：

管理データベースの修正に伴い閲覧データベースでの表示に対応した。

(ウ) TOPページフッタを検索結果一覧、詳細画面にも表示：

現在は、TOPページのみページフッタを表示しているが、同様のフッタを検索結果一覧、詳細にも表示するよう改良した。

6.2.3.2　開発内容の定義

前述の改良点について、下記のように開発内容を定義し、作業を行った。

(ア)「掲載写真のご利用について」ボタンの設置

ページ上部に「掲載写真のご利用についてボタン」を設置し、「写真原板データベース」掲載写真の利用について (https://photo-archive.jp/application/) へのリンクをはった。

図８　TOPページ

（イ）緯度経度の表示

詳細画面の撮影場所欄に緯度経度表示項目を追加した。入力がない場合は表示しないようにした。

図９　詳細画面（撮影場所）

（ウ）TOPページフッタを検索結果一覧、詳細画面にも表示

検索結果一覧画面、詳細画面にTOPページと同様のページフッタを表示した。

図10　検索結果一覧画面

	英文	
掲載媒体情報1	掲載媒体	アサヒカメラ 1952年5月号，，1952年，朝日新聞社（p.18-19）
	タイトル・キャプション	傍聴席
	かな	ぼうちょうせき
	英文	
カテゴリ		風景-室内 工芸・芸術-文化財・絵画・彫刻 工芸・芸術-日用品・民具 人物-人（複数） 人物-男性
原板種別		撮影原板 白黒 ネガ
原板サイズ		35mm判
解説		撮影：吉岡専造/朝日新聞社
被写体画像キーワード・記述		
コマ番号		00009-01407-0001
所蔵		

新規検索画面　閉じる

掲載写真のご利用を希望の方は、写真原板データベース「掲載写真のご利用について」をご覧ください。

図11　詳細画面（フッタ）

6.2.3.3　閲覧用データベースの今後について

閲覧用データベースの今後として、以下の課題への対応展開が考えられる。

・現状ではコンタクト画像の表示だけに関わるログイン機能の拡充

・他館連携方法について横断検索APIなどの検討

6.2.4　日本写真保存センターデータベースの今後について

今年度は、昨年度から引き続き効率化と正確な情報管理の改善を行うとともに、閲覧用データベースでの情報表示拡充につながる対応を行った。今後は、管理用データベースではコロナ禍での作業も見据えた、業務従事者にわかりやすい運用、操作感を備えたシステム開発が、また、公開用データベースではより利用者にわかりやすい、必要な情報が公開できるサイトとしての拡充が求められるであろう。

高瀬　博司　（凸版印刷株式会社　トッパンアイデアセンター　関西TIC本部　デジタルプラットフォーム部）

松本　亜寿花（凸版印刷株式会社　情報コミュニケーション事業本部　ソーシャルイノベーション事業部　アカウントプロデュース本部　AP第二部）

寺師　太郎　（凸版印刷株式会社　文化事業推進本部　開発部）

小宮　広嗣　（凸版印刷株式会社　情報メディア事業部　クリエイティブ本部　ビジュアルクリエイティブ部）

7　情報発信

歴史的、文化的価値のある写真原板の保存については、保存センターが国内にある全ての原板を収集し調査、保管することは不可能である。日本各地にあるミュージアムや資料館、研究機関、学校などでも多くの写真原板を保有している。しかしながら、ガラス乾板や50年以上経過したフィルムは劣化が進行し、保存方法に苦慮されている。これまで、保存センターでは、写真原板の保存に関する方法をセミナーやパンフレット配布などで情報発信してきた。「日本写真保存センター」のような写真原板のみを専門で保存する機関は世界的に見ても少なく、貴重な記録である写真原板の保存の必要性と保存方法をできるだけ広く発信していくことが保存センターの役割りでもあると考えている。

更に、保存センターで調査した原板は、「写真原板データベース」(閲覧データベース) において公開し、見ていただく方々の知識や研究に役立て、時には出版物やテレビ番組でも利用いただき、より多くの人の目に留まるような活用提案をしていく必要がある。

7.1　本年度の情報発信と利活用

このような役割認識の中、本年度は昨年度に引き続き新型コロナウイルスの感染者拡大の影響により、対面でのセミナーや写真展等の対外活動を見送らざるを得なかったのは残念であった。一方で、「写真原板データベース」での公開コマ数の増加をめざし、「本調査」の作業を精力的に行った。その結果、本年度は1年間で過去最大の7,314コマを追加し、累計で2万コマの大台を突破した。新規公開の写真家数も9名増え、データベースとして量・質ともに充実してきたと考えている。更に、データベースの閲覧数も大幅に伸びてきている。この理由としては、内容の充実と共に国の分野横断統合ポータル・ジャパンサーチとの連携による流入効果が考えられる。このジャパンサーチにおいて、同サイト内の「ギャラリー」機能を今年度から活用し、様々なテーマで写真を紹介していくことにより、保存センターが保有する写真に興味を抱いていただき、更なる利活用につながることを期待している。

写真利用については、イベント展示や出版、学校関係など様々な分野からあったが、今年度はNHKほか複数の放送局より太平洋戦争に関連する写真の申し込みが多かったのが特徴的であった。まだ本調査できていない保存センターにしか残されていない貴重な歴史的な記録写真が残っており、公開に向けて引き続き調査作業を進めていく。

7.1.1　ウェブサイト

ウェブサイト (https://www.photo-archive.jp/) では、日本写真保存センターでの写真原板保存・アーカイブ化の取り組みを紹介するほか、写真原板データベース (閲覧DB) の更新情報や、ギャラリーページの更新情報を発信するなど活動報告を行った。

7.1.2　写真原板データベース（閲覧DB）

7.1.2.1　本年度公開DBに追加した原板情報

公開DBに7,314コマの原板情報を追加し、公開原板数は合計20,413コマとなった。

追加した情報の詳細

写真家名	コマ数	掲載媒体タイトル
秋山忠右	860	『日本空中紀行』『空撮大東京』『知られざる日本の不思議百景「県境」の秘密』他
和木光二朗	15	『文藝春秋』
写真協会	1	『写真週報』
岩波写真文庫	5,607	『鎌倉』『いかるがの里』『雲』『化学繊維』『東京―大都会の顔―』『馬』『石炭』『日光』『醤油』他
片山攝三	90	『片山攝三写真展 モノクロームの軌跡 50年』
西川猛	199	『桂離宮』
髙田昭雄	80	『写真集 水島の記録 1968-2016』『髙田昭雄写真集 橋脚になった島 1972-2004』
島内英祐	177	『セピア色の吉野川 人と風景・定点観測50年』 『吉野川ふたむかし』『吉野川の贈りもの 40年の時の流れ』
渋谷高弘	147	『渋谷高弘写真展－なつかしい東京－「昭和写真帖」』『写真帳『銀座の記憶』』『昭和のワンダーランド　そして平成　『浅草いまむかし』』
清宮由美子	6	『日本のどこかに』
山﨑美喜男	33	『昭和三十六年市川市八幡神社　農具市』
髙木康允	99	『髙木康允 作品展「ふだん着の大臣たち」』 『出会いの顔』
今年度新規公開	7,314	

7.1.2.2　閲覧数の推移

本年度の閲覧データベースのPV数は18,291件、UU数は2,468人であり（2021.4.1～2022.1.31）、月平均PV1,829件、UU247人であった。昨年度の月平均PV1,164件、UU147人（2020.4.1～2021.3.31）と比較して、月平均PV数1.57倍、UU数1.68倍と大きな伸びを見せた。増加の要因としては、原板情報の追加に伴い検索可能なデータが増加した点や、ジャパンサーチからの閲覧者の流入が考えられる。

7.1.2.3　利用問い合わせページの作成

ウェブサイトに原板利用希望者向けの問い合わせページを作成するとともに、写真原板データベース（閲覧DB）に、ページへのリンクを設置した。ページでは商用利用者・教育目的利用者への利用条件を提示すると共に、問い合わせフォームを設置した。これにより、利活用の円滑化が期待される。

7.1.3　ジャパンサーチとの連携

本年度も引き続き、ジャパンサーチとの連携を行った。ジャパンサーチとの連携は、写真原板データベース（閲覧DB）の公開データをジャパンサーチ向けに変換しアップロードすることにより行っている。本年度は、ジャパンサーチで検索できるコンテンツを様々な切り口で紹介可能な「ギャラリー」機能を使用したウェブページを作成した。「ギャラリー」では、閲覧DBで公開中の写真原板画像と共に、ジャパンサーチで検索可能なコンテンツ等を同時に掲載することができる。写真原板を、撮影された時代を物語る周辺資料等と共に紹介する事で、より幅広い方に写真原板の貴重さを伝え、写真原板の利活用促進を図りたい。

作成したギャラリー一覧

・「『写真週報』掲載写真と関連資料で見る戦時下の子供たち」1938から1939年に刊行された『写真週報』に掲載された子供たちのイメージと関連資料とを合わせて紹介。
（https://jpsearch.go.jp/gallery/photoarchive-syuhou001）

・「ウィンタースポーツ」1930～60年代にかけて撮影された冬のスポーツ。
（https://jpsearch.go.jp/gallery/photoarchive-winter_sports）

・「岩波写真文庫 250 青森県 ―新風土記―」掲載された写真原板を、岩波写真文庫の本文に沿って紹介。
（https://jpsearch.go.jp/gallery/photoarchive-iwanami250aomori）

ギャラリー機能を用いて作成したページの例

罐詰の出来るまで　『写真週報第9号』より

1938年　撮影:写真協会
罐詰工場でレッテルを貼る子供

写真週報第9号を閲覧する (国立公文書館デジタルアーカイブ)

『写真週報第9号』に使用された写真原板

海の幸
撮影者不詳,写真協会,
日本写真保存センター

海辺の春
撮影者不詳,写真協会,
日本写真保存センター

水産加工業
撮影者不詳,写真協会,
日本写真保存センター

沿岸漁業
撮影者不詳,写真協会,
日本写真保存センター

7.1.4　セミナー

国立国会図書館、内閣府知的財産戦略推進事務局主催のセミナーにて、ジャパンサーチとの連携事例紹介を行った。

名称：ジャパンサーチ連携説明会～地域アーカイブをつくる・つなぐ・つかう～
日時：2021年6月11日（金）14:00～16:00
会場：オンライン開催
主催：国立国会図書館、内閣府知的財産戦略推進事務局
プログラム：1. ジャパンサーチとの連携方法の説明および連携事例報告
　　2. パネルディスカッション

7.1.5　利活用

写真貸出しは、片山攝三、渡辺義雄、名取洋之助、岩波写真文庫、写真協会、中国新聞社（松重美人）などが撮影した写真の利用希望が、出版社、イベント企画会社、学校関係、美術館、放送局などからあった。

利用目的は、写真展や展示会、イベントでの掲示、教科書・雑誌・図録掲載、新聞記事、テレビ番組など多岐に渡る。2021年12月に放送されたNHKスペシャル新・ドキュメント太平洋戦争「1941 第1回開戦（前編）」では、戦前に撮影された写真協会の14点が一度に使用されたり、中国新聞社（松重美人）の広島原爆投下後の写真が、複数の放送局のテレビ番組や出版社、学校関係で利用されるなど、本年度は戦争関連を記録した貴重な写真の利用が目立った。

河原　健一郎（調査員）
山崎　正典（事務局長）

8　支援組織

日本写真保存センターは、2006年に設立発起人会を開催して、「日本写真保存センター設立推進連盟」を設立したところから始まった。代表には森山眞弓、副代表に田沼武能が就任して文化庁に「設立要望書」を提出した。2007年には文化庁は「我が国の写真フィルムの保存・活用に関する調査研究」を委嘱事業として予算化（約900万円）し、日本写真家協会が受託した。その後より活動が本格化し、フランス・イギリス・アメリカ等のフィルム保存している施設調査も実施した。2011年から「文化関係資料のアーカイブ構築に関する調査研究」（約1,800万円に増額）に発展し、収集・保存調査の他にアーカイブ構築に関する調査にも着手した。保存調査を終えた写真原板は、2012年には文化庁から貸与を受けた東京国立近代美術館フィルムセンター相模原分館（現「国立映画アーカイブ相模原分館」）に収蔵できることになった。そして2014年に写真原板の調査研究をサポートする支援団体の組織を立ち上げ、支援組織も2021年度で８年目に入った。支援組織の設立から現在までの経過と現状について報告する。

8.1　支援組織設立の経緯と支援組織会員

保存センターの本格的な活動が始まり、取り扱う写真原板の数量が増加するにつれ、調査活動に必要な要員や資金が拡大していった。文化庁から事業費が出ているものの、これだけでは調査活動に限界が生じてきた。そこで、「日本写真保存センターの事業活動に賛同して活動を支援いただくための組織」を立ち上げるため、公益社団法人日本写真家協会とキヤノン株式会社、株式会社ニコン、富士フイルム株式会社の４者が支援組織の役割りや支援内容をまとめ、日本写真家協会の賛助会社を対象に支援組織会員への参加を呼びかけた。

結果、賛助会社は写真や印刷に関連する企業が多く、写真原板の保存や利用に関する意義の理解が得られやすかったため、初年度となる2014年には12社が会員となり支援組織が立ち上がった。

2021年度では11社１団体の12会員に支援いただいている。

- 支援組織会員（2022年３月時点　11社・１団体の12会員）

  株式会社アイデム
  エプソン販売株式会社
  株式会社キタムラ
  キヤノン株式会社
  株式会社シグマ
  株式会社写真弘社
  株式会社タムロン
  凸版印刷株式会社
  株式会社ニコン
  一般社団法人日本写真著作権協会
  富士フイルムイメージングシステムズ株式会社
  株式会社フレームマン
  （50音順）

8.2　支援組織の沿革

2013年06月　支援組織準備の３社（キヤノン、ニコン、富士フイルム）と協議会
2014年01月　支援組織立ち上げ及び保存センター実務責任者をキヤノンから派遣
2014年05月　公益社団法人日本写真家協会の賛助会員に説明会実施
2014年10月　支援組織会社12社による初の「支援組織会議」を開催
2015年04月　支援組織が14会員となる（1社・1団体増）
2015年08月　「原爆展」（展示：JCIIサロン）に支援会社が協賛
2016年04月　支援組織が13会員となる（1社減）
2016年11月　「渡辺義雄展」（展示：ポートレートギャラリー）に支援会社が協賛
2017年03月　保存センター実務責任者が支援会社のニコンから着任し責任者交代
2017年06月　「東京国立近代美術館フィルムセンター相模原分館」見学会に支援会社３社（キヤノン、ニコン、富士フイルム）から10名が参加
2018年03月　「後世に遺したい写真」（展示：みなとみらいギャラリー）に支援団体が協賛
４日間の写真展開催に約7,000名が来場
2018年06月　「国立映画アーカイブ・相模原分館（2018年４月に独立）」見学会に支援会社４社（凸版印刷株式会社、オリンパス株式会社、株式会社写真弘社、株式会社キタムラ）と文化庁から合計10名が参加
2018年10月　「後世に遺したい写真」写真展・講演会（光村グラフィック・ギャラリー）
10月25日～11月24日の開催期間中1,100名が来場
2019年01月　「日本写真保存センター作業分室」を日本写真著作権協会の支援により台東区台東に開設
2020年03月　保存センター実務責任者が支援会社の富士フイルムから着任し責任者交代
2021年04月　支援組織が12会員となる（1社減）

8.3　支援組織の支援内容について

支援組織からの会費支援は、具体的には調査作業室の整備、調査員の人件費や活動費、原板の長期保存の為の包材費、備品調達などの費用の一部に充当している。また日本写真保存センター調査活動を広報するためのセミナーや講演会などの活動費にも使用している。

支援組織の３社（キヤノン、ニコン、富士フイルム）については、事業運営に必要な要員支援を受けている。具体的には３社のうち１社からほぼ３年ごとに常勤の管理者（事務局長担当者）１名を日本写真保存センターへ派遣いただき、日常の管理業務を依頼している。過去の実績として、キヤノンより2014年１月から2017年４月まで、ニコンより2017年３月から2020年３月まで、2020年３月からは富士フイルムより後任の事務局長が派遣されている。

一般社団法人日本写真著作権協会からは、2019年１月に半蔵門本部から移転した日本写真保存センターの現在の作業所（台東区台東）を同協会負担で契約いただき借用している。

8.4　支援拡大の必要性について

昨年度から続く新型コロナウイルスの感染者拡大により、今年度上半期も経済活動が制限され、下半期になってからようやく民間企業の業績回復基調が見られるようになった。

しかしながら、半導体の不足による製造計画の遅れや原油価格の高騰からくる原材料費・輸送費などのアップ、写真展やイベントの制限などにより、支援組織の会員企業の活動にも大きな影響があったと考える。このような状況下でも、今年度も「日本写真保存センター」の活動意義にこれまでどおり賛同いただき、支援継続いただいたことに感謝申し上げる。

保存センターは実質的な活動開始から15年が経過し、この間にはまさに散逸、廃棄されようとしている歴史的・文化的価値のある写真原板の収集を行うとともに、調査作業を進めてきた。国内に残されている写真原板の全体数量から考えれば僅かな数量に過ぎないだろうが、後世に遺していくべき価値のある原板を多数収集できていると考える。

しかし、原板保存においては、調査作業が進むにつれてフィルム保存の包材費用やデジタルアーカイブにおけるパソコン機器、サーバー費用等が増加している。また、今年度より取り組み始めた画像の高精細データ作成と保存の検討についても、新たにデジタルカメラや複写機材、サーバーなどの設備追加が必要となってくる。利活用を進めるうえでのデジタル機器の増設や更新はこれまでの文化庁や支援組織からの予算だけでは運営できない状況になりつつある。

保存センターとしても、自助努力として既存経費の見直しを進め、コスト削減を図りながらこれらの必要な経費に充当していくと共に、新たに保存センターの活動意義に賛同いただける支援会員や機材提供などの支援企業を獲得したい。また、寄付金の募集方法も検討し、今後も安定的に業務が遂行できるよう進めていきたい。

山崎　正典（事務局長）

9　まとめ

令和３年度は、去年から続く世界的な新型コロナウイルスの感染拡大により国内の各大会、イベント、フォーラムなどが中止に追い込まれ、オリンピックも無観客開催という前代未聞の事態となった。

このため、日本写真保存センターでも原板収集や対外イベントなどの事業計画に沿った仕事が難しくなり、会議もリモート中心となった。しかし、このような状況下でも収集した原板の調査や保存業務は、特に日常と変わらずに進めることができた。現在、国立映画アーカイブ相模原分館に入庫した原板総数は130,521本で、閲覧データベースで公開している原板情報は20,413コマとなり、順調に増やすことができた。

今年度に収集した原板・資料は6件あった。京都出身の写真家・打田浩一（2020年逝去・63歳）は、比叡山延暦寺の光永覚道阿闍梨の回峰行を５年にわたって撮影しカラー写真集「回峯行」（春秋社1994年刊）にまとめた原板と、弟子の光永圓道阿闍梨を12年にわたって撮影したモノクロ写真集「比叡山千日回峰行」（春秋社2016年刊）の原板、約1,300本を奥様から寄贈を受けた。打田は、自身得度までして師匠と弟子の回峰行撮影に取り組み、17年かけて渾身の作品集２冊を制作。天台仏教の回峰行を知る貴重な資料となった。

写真家・和木光二朗（現JPS会員）からはこれまでにも断続的に日本全国銘菓菓子店や伝統工芸、農村歌舞伎などが撮影された約560本の原板の寄贈があったが、この度268本の追加を受けた。1970年前後の当時の世相（団地開発、パンダブーム、ディスコブームなど）を撮影したものや円谷プロダクションのウルトラマンの撮影風景、有名アイドル（キャンディーズなど）の写真もあり、当時を知る記録映像として価値がある。

写真家・髙木康允（元JPS会員、2021年逝去・86歳）からは、1997年福田赳夫内閣以降の大平正芳、鈴木善幸、中曽根康弘、竹下登、海部俊樹、宮澤喜一、村山富市など歴代内閣で大臣を務めた158名を「ふだん着の大臣たち」として発表した写真展（JCIIギャラリー）の原板。それに写真集「出会いの顔」に収められた80名の俳優、歌手、スポーツ選手、作家、芸術家、政治家など様々な分野で活躍した著名人を撮影した原板の寄贈を受けた。それぞれ一時代を築いた個性派人物のさりげない日常を切り撮っている。

岩波書店からは、「岩波写真文庫」の追加資料として編集当時の版下プリント、デジタルデータの寄託を受けた。これらは1950年代の社会背景を知る価値ある資料といえる。

中国新聞社（広島）からは原子爆弾投下直後に撮影された写真記者・松重美人（2005年逝去）の原板14コマとデューブ１コマの計15コマの寄託を受けた。

広島平和記念資料館からも３名が撮影した同様の原板26コマの保存業務委託を受けた。世界的にも価値がある資料を預かる側として保存・管理の重要性と責任の重みを感じている。

利活用については、ケーブルテレビJ:COMの昨年３月放映「つながるニュース」で保存センターが所蔵する昔の横浜港の原板などが使用され、現在と過去を比較した映像が話題を呼んだ。

又、昨年12月４日放映されたNHK総合テレビ「NHKスペシャル～新・ドキュメント太平洋戦争1941開戦（前編）」では、戦前戦中の国策グラフ誌「写真週報」に関する原板から戦前の世相を反映した47コマを貸し出し、そのうち14コマが使用された。この番組では、開戦に至るまでの市民の心の変化を、当時の日記や手記に残された言葉をAIで分析し、次第に戦争に流されていく日常を冷静に見つめ解説していた。

今日まで散逸している写真を発掘、調査、保存を目的としてきた地道な仕事が認められテレビに使用されたことは、写真が歴史の貴重な証人、との認識からであり、過去の写真から当時の時代を読み取り現代に生きる私たちの文化・社会に役立たせる上では、原板によって歴史を保存する、という当事業の大きな意味があった。このように所蔵写真の利活用が広がりを見せる中、今後もメディアへの広報活動を活発にしていく必要がある。が、コロナ禍が3年目になる中、今年度も保存センター主催のセミナーや写真展の開催が出来なかったことは残念である。今後の広報活動をどのように推進するか、宣伝広報の在り方を見直すことも必要である。又、利活用を更に促進するため、これまで公開基準として写真集や印刷された出版物を中心に一般公開をしてきたが、今後は未公開原板の中にも優れた作品があり、利活用に積極的に公開していくことも考えている。現在諸般の事情で公開してない神社仏閣や人物写真があるが、神社仏閣に関しては文化財として社会の関心が高く公開希望が大きいこともあり、一般公開を検討していきたい。又、人物写真は肖像権も関係しているので公開基準を決めながら対応していく。

保存センター運営上の課題として、当事業が15年目に入り収集する原板数の増加により、原板そのものの一時保管費用や包材費用が増加しており、それと共にデジタルデータを保存するサーバーやパソコン等のOA機器やデータ化するためのスキャナー、デジタルカメラ機器などの機材を揃え、より充実した作業体制が必要となってきた。今後は収集・保存した原板が持つ社会、文化、生活など多岐にわたった時代を俯瞰できる学芸員、学識者、研究者などを交えて写真の価値判断する組織体制を作ることも課題としており、将来的にはその各時代時代を網羅し把握した写真保存アーカイブ体系を目指していきたいと考えている。そのため一歩でも進めるための財政的裏付けも課題となっている。

最後に直近のこととして、公開している画像データについて、どのような利用においても対応できるよう､高精細化を進め質の高いデータを提供したいと考えている。そのため高精細化作業チーム（仮称）を立ち上げ、どのように作業を行うかを今後検討していく。

飯島　幸永（公益社団法人日本写真家協会理事）

本年度受け入れた写真家の作品

中国新聞社（撮影：松重美人 1945年8月6日）

午前11時すぎ、爆心地から南東約2.2キロの御幸橋西詰め、倒れ込む人、うずくまっている男女、乳児を抱える女性、救護を受ける女性学徒、警察官らが写っている。初出は中国新聞の別会社『夕刊ひろしま』（1946年7月6日付）。

午前11時すぎ、熱傷を負った人たちは、近くの広島電鉄から変圧器用の油を火傷部分に塗ってもらっている。手前の三角襟の女子生徒は広島女子商の学徒。動員先の広島貯金支局から同級生とともに逃げてきたところ。世界的な写真誌『LIFE』（1952年9月29日号）―原爆炸裂時／全米初公開―の見出しで掲載。

本年度受け入れた写真家の作品

午後２時ごろ、爆心地から約2.7キロ、翠町の理髪店兼松重宅。店は窓枠も吹き飛んだ。

午後２時ごろ、窓枠が壊れた理髪店の東側の光景。路面電車の宇品線が延びる通りを国民服の男性が歩いている。がれきは倒壊した西消防署皆実出張所。

午後４時すぎ、爆心地から南東約2.3キロの広島地方専売局前、被災者に囲まれて「罹災証明書」を書く宇品署の巡査。額を窓ガラスの破片で切り、手拭いで血止めしている巡査。『LIFE』誌（1952年９月29日号）に１頁大で掲載される。

本年度受け入れた写真家の作品

広島平和記念資料館（撮影：木村権一、林重男、深田敏夫）

木村権一　1945年８月６日　原子爆弾炸裂約５分後の原子雲。

木村権一　1945年８月６日　炎上する市中心街（三枚組）

林 重男　1945年10月１～10日　爆心地に近い広島商工会議所屋上から撮影された。（パノラマ合成）

本年度受け入れた写真家の作品

深田敏夫　1945年８月６日　陸軍兵器補給廠で被爆。
建物の２階から。

本年度受け入れた写真家の作品

髙木康允

渥美清 俳優 1964年 36才

橋本龍太郎 中曽根内閣 運輸大臣
1987年2月9日 49才

打田浩一

この図版はWeb版では
非公開としています。

『光永覚道阿闍梨写真集　回峯行』より

この図版はWeb版では
非公開としています。

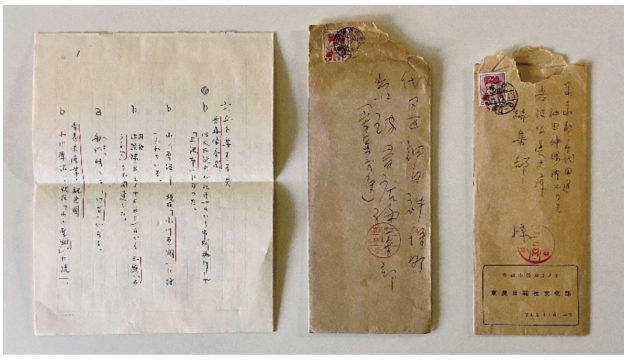
『比叡山千日回峰行―光永圓道阿闍梨写真集』より

本年度受け入れた写真家の作品

岩波写真文庫 版下プリント

『青森県 ―新風土記―』

ページごと、封筒に入れられたプリント



訂正、意見等が書かれた手紙類

『青森県 ―新風土記―』版下プリントと表紙

禁無断転載

令和３年度　文化庁
「文化関係資料のアーカイブの構築に関する調査研究」
報告書

令和４年３月　公益社団法人日本写真家協会

〒102-0082　東京都千代田区一番町25　JCIIビル
TEL：03-3265-7451　FAX：03-3265-7460
http://www.jps.gr.jp
E-mail：info@jps.gr.jp